
アンチテーゼ

ナユタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンチテーゼ

【Nコード】

N5833X

【作者名】

ナユタ

【あらすじ】

白い闇、黒い光。己の善は他者の悪。世界に完全な正義など存在し得ないのか？ 何が正しく、誰が間違っているのか――答えは出ない。しかし人が善悪を判断する他にない。心霊現象が科学で証明された世界、白い光を追い求める者達の旅。

【本拠地アーモロート】を更新しました。

001 光と闇の邂逅

『世界に白い光など存在しない。ならば……正義のアンチテーゼは、何か？』

それは正に青天の霹靂であつた。

双子の天使が描かれた巨大なステンドグラスが割られた。色とりどりの破片と共に、逆光に照らされた闇が一つ降り立つ。

そこは大理石の壁に沿って渦を巻く階段が何重にも存在する薄暗い部屋であり、巡回中の騎士団と思われる二人が慄きながら身構えていた。光の中に居る侵入者は両腕を広げ、今にも襲い掛かろうという二人へ掌を向ける。同時に掌から青い稲妻が発せられ、鎧を通して騎士団員の全身を駆け巡った。

二人は呆気なくその場に崩れ、気絶する。

「アホか」

侵入者は二人を一瞥もしない。光の中から姿を現したのは、灰色のフードに顔を隠した明らかな不審者であつた。腰にはククリの様な刃の曲がった形の剣が二本。茶色の長いコートを身につけており、そのポケットに熱の残る両手を入れた。

予定より下の階に潜り込んだらしい。容易い相手ではあつたが、なるべくこれ以上見つからずに済ませたい。先程の雷鳴により、屋内が騒がしくなっていくのが侵入者にも感じられた。

騎士を跨いで上階に続く階段を急ぎ足で駆け上がっていく。上を見上げると吸い込まれる様に高い。事前の調査は何度かしたものの、

目的地に辿り着くのは骨が折れそうだ。

広大な建造物だけにやはり侵入者は迷ってしまった。似た感じの廊下や階段ばかりが続くのだ。その間に下階から追って来た数名の騎士団員に距離をかなり縮められる事になる。その距離、もはや階段一つ分。

侵入地点の上、向かい側の場所に辿り着いた時だった。ようやく諦めたのか、侵入者も遂に足を止める。

「ウィジャ教の有する騎士団を甘く見るな。たった一人で相手にできるとでも思ったか！」

他の者とは鎧が多少違う、隊長と思わしき騎士が低い声で勝ち誇った様に叫んだ。その騎士が指示を出すと、一斉に数名の騎士団員が階段を駆け上り始める。

余計な問題を引き起こすのは極力避けたいのだが、こうなった以上は仕方がない。侵入者は溜息を漏らし、冗談混じりに答える。

「思ったね、おそらく出し抜けるだろうって」

少しビッグマウスだったかもしれない。完璧には遂行できていないからこんな状況に陥っている。

侵入者は大理石の壁に掌をかざす。今度は電気ではなく、階段との接触面が破裂し、支えの少なくなった階段は騎士団員を巻き込んで下階へと崩落していった。下から響く大きな音には人間の悲鳴も混じっている。唯一、踊り場に残された隊長は悔しさに震えながら、しかし驚いた様子だった。

「貴様、ネクロマンサー霊気使いか……！」

侵入者はフードの奥から微かな笑みを見せた。この場を楽しむかの様な余裕すら伺わせる。

「お勤め、御苦労さん」

数分後、侵入者はある一つの扉の前で再び足を止めていた。今回の目的地にようやく辿り着いたのだ。見るからに古い扉だが、少し

押すと厚みがあるらしく重量がある。

入る前に左右を見て追手が居ない事を確認すると、鍵も掛っていないこの扉を音もなく開けた。

身を隠す為に素早く入り込む。中はいかにも豪華で、且つ何処か荘厳な雰囲気併せ持った空間であった。天蓋の付いたベッド、素人目には無駄に大きな木製テーブル、窓からは白で統一された街

シャングリラのパノラマを一望できる。

そこに窓の外を眺める一人の少女の後姿があった。

侵入者が取っ手に付いた鍵を閉めると、その音に反応して少女がこちらを振り向く。緑の美しい髪は腰の辺りまであり、天使の羽衣のような装束を身に纏っている。整った顔立ちではあるが童顔だ。肌は白く、長らく陽の光を浴びていない気がする。出で立ちは神々しささえ感じられ、蒼く澄んだ瞳が侵入者を凝視していた。

侵入者はフードから顔を出す。ここまで来たら隠す必要はあまりないと判断したのだ。

「不用心だな。アンタともあろう御方が私室の鍵もせずに」

侵入者である黒髪の青年は、黒い瞳で眼光鋭く少女を見つめ返した。腰に備えてある右の剣の柄を左手が掴む。

「これから、ここを出て行こうとしていたからです。……殺される前に」

青年は面喰らった。報告が届くにはまだ早い筈である。出会った騎士は一人を除いて全て退けてきた。

だが少女はそれ以上何も語らず、青年の言葉を待っているようである。これを感じ取った彼は、沈黙を切り裂いて問いかけてみた。

「ウイジャ教最高指導者、煌位アリゼ・ソロウ。間違いないな？」

002 新たな雇い主

彼の問いの裏には何処か確信が滲んでいた。それはあらかじめ重ねられた下準備によるもの。巡礼者の振りをして何度もここに足を運んでいる。

彼の苦勞を知る由もない、アリゼと呼ばれた少女は小さく頷く。青年はククリに似た剣を左手棹から引き抜いた。危険信号である銀の輝きは、アリゼの予想を現実に変える。

迫り来る命の期限。一対一では逃れ様がない。状況を一転させる方法は、他に残されていないと彼女は思った。

近づかれる前に、アリゼは窓際にそつと手を伸ばす。指先に当たったもの、直視せずともこの部屋に武器は一つだけ。素早い動きで手繰り寄せた弓矢を引いて侵入者に向けた。

「それ以上動いたら撃ちます！」

「おっと、これは想定外」

青年は扉から数歩近づいていたが動きを止めた。アリゼは矢を放つでもなく、後ずさりしながら問い返す。

「ルダの刺客ですか？ それとも誰か他の………？」

「ルダ？ 知らねえな。俺の名は………カガシ、でいいか」

「『彼氏』、匿名ですか。それなら、貴方は誰？」

「アンタの暗殺が俺の仕事だ。以来主も名は明かせない。仕事上の規則なんでね」

カガシと自称した青年は、弓を構えるアリゼに躊躇いもなく再び近づいていく。アリゼはついたじろいてしまい、口元まで引ききっていた弦が緩んでいた。カガシには行動の一つ一つに迷いが見られない。そんな相手がこの隙を見逃す筈がある訳もなく、剣との距離は更に縮まる。

「人に向けて撃った事がないんだろ」

凶星だった。見かけ騙しではないが、趣味の域を出ない腕前である。

カガシは走って距離を詰めてきた。剣はすぐ傍、アリゼは自然と目を閉じていた。鼓動が最後の仕事を果たそうと早鐘を打つ。

（斬られる・・・！！）

そう悟った時、咄嗟に言葉が口について出てきた。

「貴方を、雇いますッ！」

人を殺める寸前のカガシは、唐突に金縛りを受けたかの様に停止した。静寂が訪れる。暗殺者とは目と鼻の先で、アリゼは慎重に目を開ける。

「フッ」

カガシの様子がおかしい。殺意が完全に消えている。振りかざされた剣は血に濡れる事なく引いていった。

「ハッハハハハハ！」

暗殺者は腹を押さえて笑い始めた。アリゼは特に考えもしないで、というよりも考える間もなく発した言葉だ。当惑したが呼吸が再開する。

「いやぁ悪い悪い。面白い、気に入った」

アリゼは弓を構え直したものの、カガシは手を差しのべてきた。

事態の急激過ぎる変化に頭の処理が追い付かない。二人の温度差は顕著に行動へと現れていた。

「雇われた殺し屋を雇い返すとはな。その言葉、本気なら武器を下ろせ」

アリゼは警戒しつつも弓矢を徐々に下ろしてみる。カガシは柔らかい表情のまま。むしろ剣を棹に収めていた。

アリゼは必死で考えた。このまま姿の見えない誰かに命を狙われ続けるなら、或いは。本当に成功するとは思いつかなかったが、これは新たな世界へ飛び出す絶好の機会なのかもしれない。彼女は決

心を固めた。

「契約するなら手を取れ。その瞬間から俺はお前の盾となる」

「勿論、完全に信じてはいません。でも」

アリゼはカガシの手を握る。緊張で汗ばんだ感触がカガシの乾いた手に伝わった。

「私はまだ生きたいから」

「契約成立。ギルドの掟に従う。以来内容は一名の――警護か」

ギルドという単語に引っ掛かった。しかしアリゼは首を縦に振る。後には戻れない。どんな生活になってしまうか想像もできない。それでも彼女は望んだのだ。緊張の波が押し寄せる。

その時、古い扉を乱暴に叩く音が部屋の外側から響いた。二人の視線もそちらを向く。

鳴り止んだかと思うと、カガシにとっては聞いたばかりの低い大声がする。一人残った隊長らしき騎士である。

「アリゼ様、ご無事でありましょうか。アリゼ様――！」

「ハイマン？」

階段が崩落した為、他のルートを回り道して来たのだろう。足音は多い。アリゼに名を知られているのなら、やはりそれなりの階級だと推測できる。

「煌位は無事だ。安心しろって」

カガシが声に出した。この返答にハイマンは最悪を予感したのか、突進で扉を破壊して部屋に入り込んだ。

「これでもう戻れない。ほら、行くぞ」

意図的に発した様だが、疑問は残る。カガシは掴んだままのアリゼの手を引っ張って窓際に立った。一般の騎士も部屋になだれ込む。「行ってくて、何処からですか!？」

カガシは答えずアリゼを無理矢理抱き抱える。そして耳元で囁いた。

「お前もネクロマンサーなら霊氣エクトプラズムの力を貸せよ」

するとカガシは窓を突き破り、地上数十メートルの高さに飛び出した。重力に従い落下する二人。アリゼの頭は真っ白になり、弓を持つていない右手はカガシのコートを必死に握っていた。突然の行動に息ができず、下はこの建造物の図書館と思われる屋根がある。

落下の少し前に、カガシはアリゼの手を取った。やっと理屈の解ったアリゼの頭に色が戻り、掌から風を生み出して屋根に向ける。カガシも風の力を併せて墜落の衝撃を弱めた。

なんとか無事、怪我はない。怯むアリゼを立たせ、カガシはこの建造物、教会を見上げる。街と同じく白で統一された美しい外観は、カガシには馴染めなかった。遙か上空で窓から下を見るハイマンの姿がある。

「すぐに追ってきそうだ。シャングリラから出るぞ」

「は、はいっ」

同じ要領で地上に降りると、二人は街の中に紛れて消えていった。

003 総本山シャングリラ

シャンバラ領、シャングリラ。バルバニア大陸の東端に位置する島の上に建てられたこの島は、世界最大の宗教「ウイジャ教」における総本山であり、巡礼の最終地点でもある。

白で統一された美しい外観はこの街独特の建築で、中央にそびえ立つ教会は世界的に有名である。何故なら、教会のシンボルと言わべきウイジャの力を継ぐ最高指導者「煌位」の住まう場所でもあるからだ。

その煌位が謎の侵入者、それもたった一人に誘拐されたとなれば、当然の如く大事件に他ならない。

しかし現実起きてしまった。決して許される筈のない事実が民衆に知れ渡るのは時間の問題であり、最悪の事態に陥る前に終息させようと騎士団は躍起になっていた。煌位の条件として素養は絶対条件とされ、一度失えばいつ現れるか解らない命なのである。

「直ちに侵入者を追え！ 奴はネクロマンサー霊気使いだ、油断するな！」

窓から顔を離れたハイマンは、唾を飛ばしながら部下に命令を下した。侵入者の特徴を話す必要はない。多くの騎士が煌位の私室へ雪崩れ込んでその姿を確認している。いずれ全体に伝わる筈だ。

ハイマンも自身が破壊した扉から部屋を出る。その際、階段の渦巻く部屋に出ると、ハイマンの指揮下ではない二人の騎士を引き連れた老年の男性と擦れ違った。

周囲に流れる緊張。紫色のローブを身に付けたこの男性の顔を知らない者は教会に居ない。

燦位ルダ。アリゼの煌位に次ぐポストの燦位は教会に現在三名の

みであり、まだ若い煌位に代わる組織のブレインの一人である。彼の顔は法令線が目立ち、感情はあまり表情に出さない。

「逃げられたのかね」

ハイマンを見ず、ルダは足を止めて静かに問う。問うと言っても疑問符は付いていないような言い方だった。

「申し訳ありません。直ちに手配します」

ハイマンが頭を深く下げると、ルダは無言のまま彼を通り過ぎ、煌位の私室へ入って行った。ルダはアリゼの居なくなった部屋を眺めて呟く。

「見事ですな、煌位」

カガシはアリゼの手首を引き、シャングリラの街を駆け抜けていた。途中、人目が多い通りになると路地裏を探して身を隠しながら進む。走ればどうしても目立つ為、二人は道とも言えぬ道へ忍び込んだ。

路地裏は白い壁に左右を囲まれ、住民に忘れ去られた家具が蜘蛛の巣を張って居座り、狭い道を更に狭くしていた。本来は道として利用する事はやはりないようで、昼だというのに人氣が全く感じられない。加えて日陰ばかりで閑散とし、隣の大通りとは別の街のよな印象を与える。近道にはなりそうだが、これはもはや家と家の隙間と言って相違ない。

煌位ともあろう者がこんな足場の悪い場所に來た事がある訳もなく、アリゼは何度が転びかけてしまう。日常生活の中でこれ程継続的に走る事など滅多にない為か、カガシのスピードに付いていくの

で精一杯だ。

「この街につ、地上からの出入り口は二つだけですっ」

息も絶え絶えにアリゼは助言する。

「南西と北西にある橋がつ、バルバニア大陸に繋がっていますっ」

「太陽を見たか、今は真昼だ。俺は人目の少ない南西に向かっていく」

対照的にカガシは疲れた仕草一つ見せず、至って落ち着いているように見えた。この状況で内心はそんな筈がないのだが、これが彼の雰囲気なのだろうとアリゼは感じた。又は、逃げ道まで確認しておいた下調べによる自信か。

やがて島の先端に辿り着くと、大陸とを結ぶ鉄骨の橋が現れた。二人の騎士がその両端に立ち、出入りする人々を見張っている。ここは世界各国から人が訪れるので仕方ない事だ。どさくさに紛れて訪れる、要人を襲う目的を持った怪しい人物がいるかもしれない。例えるならばカガシのような。

アリゼとカガシは家と家の隙間からこの状況を覗いていた。この騎士にまではさすがに脱走の情報は届いていないだろうが、周囲に人目が完全に皆無という事でもない。走って通り過ぎるのは無理がある。

「強硬突破でいくか」

「駄目です！ 彼等は私達を襲ったりはしていないじゃないですか！ 彼等の上に立つ者として、私が禁止し……」

静かにしろ、のポーズを取ってカガシは口を挟む。

「あのな、俺がお前の部屋に着くまで誰にも見つかっていないとでも思ったか？ それに、後で顔を覚えていたりしたら足が洗われる。逃げ切ったとしても騎士団にはすぐに情報がいくだろうしな」

もつともだった。手に取ったままだった弓矢があるが、出来ればより安全に脱出したい。そこでカガシは即席の策略を作った。アリゼも渋々その作戦に乗る事にした。

アリゼは掌から水を発生させる。島の上の街なので地面は端にいく程に低い。伝う水は少しずつ前進し、見張りの騎士の前に達した。流石に違和感に気付いた二人は水の出所へ向かうが、この時に水浸しの地面を踏む。カガシはこの瞬間を見計らい、掌から地面に電流を流した。

電流は水、鎧、身体の順序で伝わり、二人の騎士は同時に前のめりで倒れる。近くで悲鳴が上がり、カガシとアリゼは大通りに出てから橋に向う。怪しまれないように急がず歩き、アリゼにはカガシのコートを着させてフードを被せた。

難無く人だかりを横切る事ができ、島から最初の一步を踏み出した。

暫くして振り返ると、倒れた騎士が起き上り、集まっていた野次馬が解散しているところだった。

「大成功。そろそろ走るか」

「良心が痛みます……。カガシは思わないんですか？ 本来なら大成功、じゃありませんよ」

カガシは小走りになってアリゼのフードに隠れた顔を見る。目を細め呆れていた。

「忘れてもらったら困るが、俺は暗殺者だからな。そんなもんはとつくの昔に捨てた。って、そういうお前こそ結局手を貸したじゃねえか」

「あ、あれは仕方なく、ですっ！ 一緒にしないでください」

アリゼは早足でカガシに付いてくる。思えば初めてまともな会話になっている気がした。

「それと、俺に敬語はやめろ。お前はもう俺の依頼主だし、それに……どうも慣れねえ」

「そう、ですね。すみません」

「……アホか、お前は」

アリゼの着ているカガシのコートが潮風にたなびく。左右のシャングリラ港を鉄骨の橋が分断し、西側にバルバニア大陸が望める。反対側は見渡す限りの海に黒いシルエットの小さな島々。橋は微妙な曲線を描き、遠くで大陸の先端を掴んでいた。

アリゼはこれまで煌位として人生の大半を過ごしてきた、教会という狭い世界しか知らなかった。世界を導く為政者等との会議であっても、開催地は中立の立場を取るシャンバラばかりだ。本で外の世界の知識を得る事は可能だが、実際に出てみないと解らない事が沢山あるのも承知している。彼女には、街からそれ程離れていないこの景色に映るものの全てが新鮮であった。

どんな生活だろうと受け入れる、アリゼは不安を拭うように自分に言い聞かせた。遠ざかる教会を背に、カガシはアリゼの心を見透かしたように言う。

「安心しろ。こうした以上、死なせはしない」

怪我の可能性を否定しない冗談のつもりが、アリゼは黙って頷くだけ。迷いがあるからか、彼女は教会を一度も振り返りはしなかった。

きつと、長い逃避行になるであろう事を、半ば理解した上で。

004 背中合わせの約束

通常ボトムバレー、二人はシャンバラ領に存在する大きな渓谷に差し掛かっていた。平地を選ぶ事もできたが、より人目につかないルートを選択したのだ。バルバニア大陸に辿り着いたとはいえ、まだシャングリラからそれ程離れてはいない。なるべく距離を取りたい。

目的地はとりあえず最も近い街、アーモロート。ギルド本拠地である高く太い塔が目印で、ここからもその雄大な姿が目視できる。

渓谷は、深山幽谷という言葉そのもののような景色が続く。両側を挟む山の奥に行けば仙人が住んでいそうな趣がある。付近には渓谷を作り上げた原因と思われる小川が流れ、せせらぎが僅かに耳に届いている。緑も所々で見え、急斜面に無理矢理根を下ろす樹木まであつた。

このルートを人が通らないのは、道が険しい為だけではない。見るからに解るが、野生生物が人を襲った事例をカガシは聞いた事がある。

いずれにせよ早く切り抜けるに越した事はない。

日は西に傾き、左側の山を赤く染め始めた。基本的に話す事もなく黙々と歩くカガシに遅れないよう、後ろからアリゼがくつついていく。コートはカガシに返されている。足元が悪いので下を向いている時間が多く、無言の空気を気にするようにアリゼはよくカガシに視線を上げた。限界が訪れたのか、自ら話を切り出してみる。

「あの……カガシの狙いは、元々私の暗殺なんですよね。良かったのですか、これで」

カガシは敬語の注意を既に諦めていた。

「いいも悪いも、俺は玉砕覚悟だった。お前の靈氣エクトプラズムがなかったら、あんな高さから逃げたりもできなかっただろうしな」

アリゼの足取りが急激に重くなった。あの時、雇わなければ自分もろともカガシまで死んでいたかもしれないと思うと、本当に恐ろしい。

靈氣とは、この星 エリユシオンの万物に宿る火・水・風・電・地の属性を持ったエネルギーだ。これを操る者を靈氣使いネクロマンサーと呼ぶ。カガシが騎士を退けた稲妻も、教会を飛び降りた時の風も靈氣によるものである。

再び沈黙が場を包む。応答のないアリゼを気にして足を止め、振り返ったカガシは溜め息をついた。時間に比例して着実にアリゼの足取りが重くなっている。今の話も相まって、今日は無理をしない方が良くと悟った。

「仕方ねえ。風が凌げる場所を見つけたら休むぞ。これから動いても危険だ、そこで野宿にする」

「あ、私ならまだ……！」

正論で返すのであれば、できるだけシャングリラから離れるべきだろう。しかし、アリゼには肉体的な疲れ以外にもある筈だった。

「俺が疲れたんだよ」

促す為の言葉ではあるが、実際カガシ自身もかなり疲れが溜まっていた。アリゼは小さな声で感謝の言葉を呟いた。

日が山の頂に姿を消した頃、二人は大きな岩の陰に無言で座っていた。カガシが集めた薪に火を灯し、暖は取れているので心配はない。問題は食料と寝床、そして会話が皆無である事。周囲に実のなっている樹木は見当たらない。明日にはアーモロートに着くという事で、空腹は耐えなければならぬようである。

アリゼは確かにまだカガシを完全に信じている訳ではないようだが、暗殺者に対するその挙動は当然のものだろう。

カガシは基本的に寡黙だ。腹の内が見えない彼の言動が更に拍車を掛けて不安にする。焚き火から視線を反らしたアリゼは、唐突に重い口を開く。

「どうして私を助けたのですか？ 命まで懸けていたのに……」

「なんとなく、だ。実はお前を刺す事にも戸惑いがあった。俺にもよく解らねえ」

アリゼは岩を枕に、夜空に瞬く星を見上げた。彼女の想像以上に、複数の黒幕が居るのは間違いないようである。ウィジャ教は世界最大の宗教。そのトップである煌位を消して利がある者。

素養が要る煌位が空席の際、臨時指導者は燦位となる。だがカガシは最も怪しいルダを知らない。あの言葉が嘘には見えず、詮索は早くも暗礁に乗り上げた。

焚き火の煙が天を昇っていく。カガシが諸刃を磨いている間に、アリゼは座りながら眠りに落ちていた。

そこはかとなく、寝顔を眺める。一見すれば普通の少女なのに、彼女は目に見えない重過ぎる荷を背負っている。願った訳でもなく、代えの利かない煌位として白羽の矢が立った。

無邪気な寝顔はまるでそれを感じさせないが、せめて寝ている間は普通の少女でいていいのだ。カガシはそつとコートを上から被せた。

「初野宿のくせに寝ちまって、見張りの交代はどうするつもりなんだよ」

こんな時は独り言を言って、側の岩に登る。岩陰で眠るアリゼの呼吸以外は静まり返っていた。カガシは腰を下ろして目を瞑り、神経だけは尖らせた。夜風が少し寒い。

早朝、冷たい空気と靄が立ちこめる。アリゼは目を覚ますと、被せられたコートを見るなり笑みを浮かべた。酷い空腹の中、立ち上がって周囲を見渡すがカガシは居ない。

「起きたか」

頭上からの声に振り向くと、枕にしていた岩の上に彼は座っていた。駆け登っていくコートをカガシに掛けると、アリゼは背中合わせに腰掛ける。

「優しい所もあるんですね」

アリゼはカガシの背中に寄り掛かってからかった。

「アホか、おかげで一睡もしてねえよ」

「すみません。あ、照れてます?」

カガシは無視を決め、返事をしない。きっとその通りなのだ。

「……ありがとうございます」

この言葉にカガシは戸惑った。仕事柄、感謝される事に慣れていない。しかし、昨夜の配慮は自分でも可らしい程に厚かった。

「私、やっぱり貴方を信じていみようと思います。だから」

アリゼは首を後ろに向けると、カガシは横目で彼女を見ていた。

「約束です……貴方を信じますから、私を信じてください」

「持ち主が自分の盾を信じなくてどうする」

アリゼは教会での契約を思い出した。これからお前の盾になると。

カガシはコートを羽織って岩から飛び降り、薪の燃えかすを踏みつけた。アリゼも明るい表情のまま、岩を降りて彼に近寄る。

「これから、よろしく願います!」

丁寧にも一礼し、返す言葉の解らないカガシに続いて歩き出す。

アーモロートまではあと半日で着くと思われる。深い溪谷の二人だけの時間を経て、互いが相手を少し知る事ができた。

005 本拠地アーモロート

カガシとアリゼがボトムバレーを南下する数時間前、シャングリラ。前代未聞の騒動で教団が混乱に陥っている最中、一人だけ教会内の大理石に寄りかかって辺りを見回す男がいた。

まず目を引くのは、左が群青、右が紅というオッドアイであることだ。男性にしては少し長めの髪は雪のような銀色で、無気力な眼を半分くらいは覆い隠している。和服に似た紺色の格好をしており、この場にはいささか不釣り合いだ。何か人を近づかせない、エクトプラズム靈気とは異なるオーラを放っているようであった。

「カガシの奴、らしくないじゃないか」

彼は慌てふためく多くの人間を観察しながら、この状況を楽しんでいるかのように笑みを浮かべた。誤算どころか大誤算。いくら暗殺者といえども、たった一人で煌位のところまで辿り着けるはずはない。そこまで騎士団も落ちぶれてはいないだろう。

この男が裏でアシストしていなければ、カガシは煌位に出会ってさえいない。事前に別の騒動を引き起こし、騎士の数を大分減らすことができた。そこまでして、カガシは任務を放棄しアリゼを殺害しなかった。まして誘拐まで行ったことが、彼のアシストだけでなく予想まで裏切ったのだ。

衝動的な行動だとしたらカガシらしくない。だがそれが面白かった。許す、許さないの問題よりも、これからの二人の行動に興味が湧く。

一度、ギルドに戻った方が良さそうだ。彼は混乱のどさくさに紛れ、教会を後にした。

「到着だ。ギルドの本拠地、アーモロート」

カガシとアリゼは谷を抜け、高い塔のある活気あふれた街に着いた。あの塔こそギルド本部である。歴史はまだ深くはないものの、シャングリラへの莫大な献金によりシャンバラ領内に置かれ、唯一の国家「エルドラド」とシャンバラ双方から寄せられる依頼を請け負っている。一般人からの指示は厚いが、中には法に抵触する依頼を請け負うギルドも存在し、お尋ね者になっている者もいる。例えば カガシのような。

本部までのメインストリートにも商店が左右に軒を連ねている。いわば経済の中心地だ。本部はギルド加盟者の生活の場としても機能している為、人口はウィジャ教総本山であるシャングリラにも劣らないと言われる。

煌位はあまり人前に出てこないのだが、アリゼは念のためカガシの上着を着てフードを被っていた。攻め寄ってくる店への勧誘を断りながら、二人は本部の塔に直行した。何故かカガシまでも周囲を気にしていて、あまり人目に付きたくはないようであった。

本部の真下に辿り着いた。横にも縦にも長い塔を見上げつつ、入口まで続く大きな階段を上った。往来する人々は、ほとんどがギルド関係者だと思われる。早足で開かれたままの扉をくぐると、塔のほぼ全容が一目で把握することができた。

一階から最上階までが吹き抜けになっている。階数は数えきれないが、各階を大量の人間が往来しているのが見えた。一階から伸びた巨大な支柱は天井まで続いており、全てが大迫力である。カガシは特に驚くこともないが、アリゼにとっては初めての環境だ。初見の衝撃は相当のものだったらしい。

「ふわぁ……カガシ、見てください！ 上が全部見えます！」

「俺はこのモンだ。この景色は見飽きたな」

「あつ、そうでした。でも、毎日こんなところで生活しているんですよね！」

アリゼは目を輝かせて辺りをくまなく見渡していた。おそらく、ここへ来た理由が解っていないようだ。

「言つとくが、今日からお前もここで暮らすんだよ。身を隠すには持つて来いだ」

「え！？ それでアーモロートに向かったんですか？ 登録の時にバレてしまうんじゃない？」

「アホか、偽名に決まってるだろ。馬鹿正直に登録してどうする」アリゼの手を引き、入口の向かいにある受付に連れていく。右側にはギルドを指定しない依頼を集め公開したボードがあるが、今はこれには目もくれない。察したのか、担当の女性はすかさず登録書を用意した。

「登録の場合は、こちらの契約書にお名前をお願いします。既存のギルドに加盟される場合はこちらの用紙です」

カガシに指示され、新規登録用紙を受け取った。契約書には『職業がある場合は離職して頂くことになります』とある。アリゼは心配そうにカガシへ視線を向け、助けを求めた。

「職業を聞かれることはないが、遊びで加盟されちゃ迷惑だからな。その対策として離職する必要がある。……迷っている場合か？」

「そ、そうですね。煌位を職業と言うのかどうか考えてしまいましたが」

偽名を使い、ようやく登録を済ませた。当然だが、一人暮らし専用の持ち部屋を紹介された。かなり上の方だ。おそらく下の階は埋まっているのだろう。カガシはとりあえず安心した。

空き部屋に入ると、やはり二人では多少の息苦しさを感じられた。登録上、カガシとアリゼは別のギルドなのだから仕方ない。ベッド、机、椅子が一つずつ。家具はそれを顕著に表している。

窓からは遠くにシャングリラが見える。それ程に高い位置にある

ようだ。カガシはベッドに腰を降ろし、この数日に溜まった疲労をやっと少し回復した。欠伸の後、唐突にアリゼが問いかける。

「カガシにはカガシのギルドがあるんですよね。そこに戻らなくていいんですか？」

「それは……お前が気にするな。ただ、一つ気をつけてくれ」

カガシの表情は妙に真剣であった。アリゼにはここに来てからの彼の様子が謎のままだ。

「LOG（ログ）の人間にはなるべく会わないようにしてくれ。ランパート・オブ・ギルド、本部の防衛を主な仕事とする最大のギルドだ」

「私は、どれがそのLOGの人なのか知りませんよ」

「そつ、だよな。えつと……」

その時、塔の全体から轟音が鳴り響いた。全て人の声によるものだ。カガシは一つしかない窓を開け、アーモロートの街を見下ろした。

「例えば、あれだ。見てみる」

アリゼが急いで顔を出すと、街の入口に暴れ狂うイノシシが見えた。人よりも大きな体格を誇り、目の前の男性に狙いを定めている。近隣の山から下りてきてしまったのかもしれない。最も危険な位置に立つその男性は、黒と赤の服を身に纏い、鎧さえ装着していない。ただ一つ、右手に大剣を握りしめていた。

「デュオン・ローレンツ。LOGの頭であり、ギルド全体の統括者と言っているだろうな」

アリゼは慌てるというよりも、声が出せないで見とれているようであった。デュオンは大声援を背に、片手で大剣を構えた。巨大イノシシは走り出す。

デュオンは衝突の直前で右に体を反らし、イノシシの体に横一線の切り傷を付けた。深く抉られ、イノシシは走りながら無残に転がった。声援に応えるでもなく、当然のことのようにデュオンは本部

へと戻ってくる。彼には人を魅了するオーラを放っているようであった。

カガシの注意に疑問を抱えつつも、アリゼは真剣な表情のために再び聞き直すことができずに黙って頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5833x/>

アンチテーゼ

2011年12月21日16時24分発行